

大正版『福澤全集』「時事論集」所収論説一覧 及び起筆者推定

平 山 洋

I 解説篇

1 福澤諭吉の『時事新報』論説を研究する者は少ない

現在の『福澤諭吉全集』全21巻のうち計9巻を占める「時事新報論集」が全体として研究の対象とされたことは、これまでまれであったといってよい。その理由ははっきりしている。明治15(1882)年3月に創刊された『時事新報』の社説として掲載された「東洋の政略果たして如何せん」(1882-12-7/12¹⁾)や「東洋の波蘭」(84-10-15,16)、また「脱亜論」(85-3-16)などの諸編はそれまでの福澤の思想を無為にしかねない侵略賛美の論説として悪名が高いうえに、何より全部で1500編以上という膨大な数が研究する意欲を萎えさせてしまうのだ。

その上『時事新報』を初出とするものの掲載後に単行本として刊行された『日本婦人論後編』(85-8)や『福翁百話』(97-7)、また『福翁自伝』(99-6)などの重要な著作は、『全集』では「時事新報論集」以外の巻に収められているのであるから、残された論説はもっぱら福澤批判者が、彼をおとしめるための材料を探すために読んできたといってよい。実際そこには、「脱亜論」ほどには有名ではないにせよ、中国人を「チャンチャン」呼ばわりした多くの「漫言」²⁾やら、日清戦争後に植民地となった台湾で蜂起した現地人を皆殺しにせよ、と主張する「台湾の騒動」(96-1-8)などの論説が含

1) 本資料では福澤の著作については初出を西暦で表記し、その上2桁はしばしば省略する。岩波書店刊『福澤諭吉全集』に収録されている著作・論説については、初出の年月日だけで位置を確定できるため巻数と頁は表示しない。(1882-12-7/12)は1882年12月7日から12日まで掲載を示す。論説は発表日まで示すが、単行本は刊行月までの表示とする。引用文はカタカナ漢字混用文はひらがな漢字混用文に変換し、適宜句読点や括弧付きで語句を補い、元号表記の暦数には西暦を加える。さらに著作の表題は2度目からは適宜省略して表現する。

2) 本資料では論説と演説を考察の対象とし、風刺時評である漫言は扱わない。

まれている。

加えて「時事新報論集」には、『全集』の他の諸巻にはない深刻な問題がある。それは「論集」所収の諸論説が本当に福澤の手になるものであったのかは実のところ分からない、ということである。『全集』第7巻までの諸編は福澤自らが自作と認めた著作群である。しかし第8～16巻所収の「時事新報論集」は、演説の再録が署名入りである他は、ほぼ全ての論説が無署名で発表されているのである。それらは現行版の『全集』のもとになった『福澤全集』(1925～26・大正版)と『続福澤全集』(1933～34・昭和版)の編纂者である弟子の石河幹明が福澤のものとして選んだ論説群にすぎない。

そこで本論は福澤の『時事新報』論説を研究するための準備作業として、大正版『全集』の「時事論集」に収められている論説を取り上げたい。先ずⅠ解説篇では『時事新報』論説全般についての解説を行う。続いてⅡ資料篇では、大正版「時事論集」掲載論説をリストアップしたうえ、それらの実際の起筆者を推定する。

2 『時事新報』論説とは何か

新聞『時事新報』とは、福澤が自らの意見を表明する場として創刊した新聞である。編集部も当初は三田の慶應義塾内にあり、社員も皆弟子たちであったから、初期の同紙が福澤の強い影響を受けていたことは確かである。

創刊号の「時事新報」欄は「本紙発兌之趣旨」(1882-3-1)と題されていて、「其論説の如きは社員の筆硯に乏しからずと雖ども、特に福澤小幡両氏の立案を乞ひ、又其検閲を煩はすことなれば、大方の君子も此新聞を見て、果して我輩の持論如何を明知して、時としては高評を賜はることもあらん」と「我輩」がその掲載論説の性格を説明している。つまり日々の論説は基本的に記者が執筆し、時には福澤立案の論説も掲載されるということである。『時事新報』の社説は常に「我輩」が問題を提起する形をとっているため、『福澤論吉全集』の「論集」に現れるとそれが福澤自身のことと誤解されやすいのだが、この「我輩」とは、形式的にはその時々の主筆(創刊時は中上川彦次郎)の一人称である。

さて、社説として毎日掲載される論説がどのように成されていたかについては、『福翁自伝』が口述されていた1898年頃のこととして、「紙上の論説なども石河幹明、北川礼弼、堀江帰一などが専ら執筆して、私は時々立案してその出来た文章を見て一寸々々加筆するくらいにしています」³⁾とある。このように晩年については自ら筆を

3) 現行版第7巻250頁。

執ることは少なくなっていたようであるが、それ以前はどうであったのであろうか。

1885年4月から編集に加わり終生福澤の近くにいた石河幹明は、「私は明治十八(1885)年時事新報社に入り暫くの間は外国電報の翻訳等に従事してゐたが、同二十(1887)年頃から先生の指導の下に専ら社説を草することになった。当時「時事新報」の社説は先生が自ら筆を執られ、或は時々記者に口授して起草せしめらるゝこともあったが、其草稿は一々厳密なる修正添削を施された上、紙上に掲載せしめられた」⁴⁾と述べている。要するに福澤の作とされる論説も多くは弟子の起筆にかかるものであったのである。

福澤の書簡から確かめられた社説記者は、渡辺治(編集部在籍1882-4~89-1)、高橋義雄(82-4~87-7)、石河幹明(85-4~1922-5)、菊池武徳(87-4~94-12)、北川礼弼(94-4頃~99-?)、堀江帰一(97-3~99-7)らであった。これらの人々は社説を代作した当時の若手記者たちであって、その他に正式な主筆である中上川彦次郎(82-3~87-4)や、社説記者の指導役であった波多野承五郎(82-3~84-7)、さらにアメリカから草稿を送ってきた日原昌造らの論説が「時事新報」欄に掲載されることもあった。

同紙は福澤存命中に約6000号発行されているため、「時事新報論集」に収められた約1500編の論説は、全体のおおよそ4分の1である。福澤起筆のものがかくも多量にあるとは考えにくいので、彼がどの程度まで関与したものまで採られているかが問題となってこよう。

3 『全集』編纂者石河幹明

福澤の存命中から現在まで『福澤全集』と称される企画は都合4回立てられている。

このうち通常明治版と呼ばれている時事新報社刊の5巻本は福澤自身の発案にもとづくもので、その時まで刊行されていた福澤名義の著作が集められている。現行版では第6巻所収の『実業論』(1893-5)までに相当している。それ以後の出版物や『時事新報』の無署名論説、さらに書簡は収録されていない。

この明治版は約4半世紀の間命脈を保ったが、重要と思われる著作のいくつかが抜けている不便さがあったため、1925年になって新たに国民図書刊行の大正版10巻の企画が持ち上がった。その編纂には3年前まで同紙の主筆を務めていた石河幹明が携わったのだが、そこには未載単行本ばかりでなく、第8巻から第10巻までの3巻を「時事論集」として社説等と漫言が収められることになった。

4) 昭和版第5巻(1934-4)「附記」737頁

この大正版の「時事論集例言」で石河は、「福澤先生が時事新報創刊以来その紙上に執筆せられたる論説は約五千篇ある可し。編者曾て社説起草の参考に供する為め其主要なるものを抄写して之を坐右に置けり。今回時事新報社が一万五千号の記念として福澤全集を発刊するに際し之を「時事論集」と名けて其中に収録することゝせり」⁵⁾と述べている。

その一方石河は大正版の企画と前後して慶應義塾から福澤諭吉の伝記執筆を依頼されている。林毅陸塾長による『福澤諭吉伝』の「序」には、「大正十二(1923)年六月、慶應義塾評議員会は、義塾の事業として福澤先生の伝記を編纂するに決し、之を石河幹明氏に囑託することとし、其の快諾を得た。次で同年九月下旬より、義塾図書館内に編纂事務所が設けられ、それより七年有余を経たる昭和六(1931)年三月、伝記の完成を告げ、今や漸く其の出版を見るに到つたのである」⁶⁾とある。

すなわち石河は伝記の執筆依頼を大正版編纂に先だてて受けており、在学中であった富田正文を助手として伝記の資料を収集するかたわら、この全集を出版したのであった。そのためこの大正版は杜撰なものとならざるをえず、その「端書」には、「先生の遺文は此他にも甚だ多く、時事新報所載の分のみにても尚ほ数巻を成すに足るものがある。是等は更に編纂して出版することになつて居る」⁷⁾とある。また「時事論集」についても石河自ら「全集発刊の事急に決したるを以て差向き編者の曾て抄写し置けるものを其儘収録したる次第なり」⁸⁾と弁解をしている。大正版発刊の時点で、『続全集』として未収録の論説や書簡集を編むことは既定のことであったのである。

1931年の『福澤諭吉伝』全4巻の完結後、石河は引き続き懸案となっていた岩波書店刊行の『続全集』全7巻(昭和版)を編纂することとなった。その「序」で林塾長は、「明治十五(1882)年三月以後の時事新報社説数千編の中より、先生執筆のものを撰り抜くことは、多年先生に親炙し且つ先生と文筆を共にしたる石河氏にして、始めて其の的確を期し得たのである。本全集の完成は実際に石河氏あるに依りて能く実現し得られたものである。予は之を特筆せざるを得ないのである」⁹⁾と記している。

先にも触れたように、現在端的に『全集』と呼ばれているのは大正版『全集』と昭和版『続全集』を併せたうえ、さらにその後に発見された論説や書簡を収蔵した富田

5) 大正版第8巻(1926-6)「時事論集例言」1頁。

6) 岩波書店刊『福澤諭吉伝』(以下『福澤伝』)第1巻(1932-2)「序」1頁。

7) 大正版第1巻(1926-9)「端書」1頁。奥付から判断して大正版は「時事論集」を先に刊行したようである。

8) 大正版第8巻「時事論集例言」1頁。

9) 昭和版第1巻「序」2頁。

正文・土橋俊一編の現行版『福澤諭吉全集』全21巻である。この『全集』は石河編纂の2つの版をそのまま引き継いでいて、「時事新報論集」についても所収の論説を新たに判定しなおすことはせずに新発見のものを83編増補したにとどめている。

とはいえ1860年から99年までの39年間に書かれた署名入り著作が6巻半（第7巻の後半は草稿）であるのに対し、1882年から1901年までの福澤の生涯最後の19年間に発表された無署名論説がその約1.4倍の9巻あるというのは、奇妙なことではある。それは無署名論説が署名著作の約2.8倍のペースで量産されていたことを意味しているからである。合理的な解釈としては、福澤の出したアイディアを社説記者が完璧に文字化したゆえに、それらも『全集』に収められる資格がある、ということになるだろう。

4 石河による選別の確実性について

現行版『全集』の「時事新報論集」はおおむね2つの層で構成されている。大正版に収録されている224編¹⁰⁾と昭和版に収められた1246編である。

すでに引用したように、石河は大正版「時事論集」を編集するにあたって「編者曾て社説起草の参考に供する為め其主要なるものを抄写して之を坐右に置けり」と書いている。つまり福澤筆と見なされていた社説を「抄写」したということであるが、すでに印刷されている社説を肉筆で写すというのは奇妙なことであるので、福澤のものとみなしうる社説のスクラップブックがあった、という意味であろう。

その大正版「時事論集」の信憑性は、福澤存命中にまでさかのぼる資料に基づいているため昭和版よりも純度が高いであろうという推測を述べる以外はない。とはいえそのスクラップブック(?)は石河自身が作成したのであるから、福澤真筆の論説だけが収録されているという保証もない。あくまで石河が福澤のものと判断した論説が入れられているにすぎないのである。

いっぽう昭和版「時事論集」となると、福澤が実際に書いたもののほうがまれになっている。昭和版第5巻の「附記」で、論説の載録を終えるにあたり、石河自ら「(明治)二十四五(1891、2)年頃からは自ら草せらるゝ重要な説の他は主として私に起稿を命ぜられ、其晩年に及んでは殆ど全く私の起稿といつてもよいほどであつた」¹¹⁾と白状している。つまり現行版『全集』における「時事新報論集」の当該部分、第13

10) 大正版「時事論集例言」には社説等223編を収めるとあるが、目次で題名を数えると225編ある。そのうち現行版の『全集』では第5巻に収められている「国会論」『郵便報知新聞』(1879-7-29/8-14)を除く224編を調査の対象とした。

11) 昭和版『続全集』第5巻「附記」737頁。

巻から第16巻までの4巻に収められた論説の起筆者は主に石河であったということである。

これまで『時事新報』論説に触れることのあった読者たちは、その中に『学問のすゝめ』(1872-2~76-11)や『文明論之概略』(75-8)とはなはだしく異なった調子のものがあることに違和感を覚えながら、これは福澤のものではないのではないかと、とはなかなか言い出しにくかった。

それというのも富田正文が執筆した現行版『全集』第8巻の「後記」には、「『時事新報』の社説は一切無署名で、他の社説記者の起草に係るものでもすべて福澤の綿密な加筆刪正を経て発表されたもの」¹²⁾であるとあるため、たとえ文体に福澤らしさが希薄なものが含まれていてもまれな添削洩れとするならば納得がいくし、なにしろ権威ある石河幹明が選び、その後継者である富田が詳細な解説をつけているのである。少なくとも立案には福澤が関わっているであろうから、文章に少々妙なところがあったとしても全体としては彼の思想の枠のうちにあるのだろう、と解釈してきたわけである。

しかしそうした希望的観測の根拠はといえば、『福澤論吉全集』編纂の労を以て1965年の学士院賞を受賞した富田正文が、石河幹明の証言することだから正しい、と述べている事実には極まるように思われる。

実際のところ石河は数多くの無署名論説から福澤が書いたものを選び出す選択眼を持っていたかも知れないし、持っていなかったかも知れない。富田が石河の助手になった時点で福澤存命中に『時事新報』に在職していた人々はほとんど鬼籍に入ってしまったのだから、そのことを客観的に立証する手だてはない。また、選択眼があったとしても、その能力を誠実に行使して論説を選び出したかどうかは分からないのである。

5 井田進也の判別法

ここで先に進む前に、起筆者を基準として『時事新報』論説の分類を試みたい。

石河の証言を信じるならば、大正版『福澤全集』と昭和版『続福澤全集』、さらに現行版『福澤論吉全集』に含まれる『時事新報』論説は、①福澤が全面的に執筆したものと、②福澤の立案を社説記者が起稿してさらに福澤が添削したもの、の2通りがあることになる。さらに『全集』に収められることのなかった『時事新報』社説全般についていえば、加えて、③記者が立案執筆したものを福澤が添削した論説と、④全

12) 現行版『全集』第8巻671頁。

面的に記者が執筆して福澤は関与していない論説、の2通りがあるはずである。

すなわち、福澤が関与した度合いを基準にして無署名の社説を分類してみるならば、福澤存命時の『時事新報』論説は、

I 福澤が全てを執筆した「福澤真筆」

II 福澤の立案を社説記者が下書きし、さらに福澤の検閲を経た「福澤立案記者起稿」

III 記者の持ち込み原稿を福澤が添削を施した「記者立案福澤添削」

IV 全面的に記者が執筆して福澤は全く関与していない「記者執筆」

のいずれかのカテゴリーに属することになる。

前にも触れたように、カテゴリー I の福澤真筆だけで約1500編というのではいかにも多すぎるが、I 以外に II のものが多数含まれているということによってようやく説明がつくわけである。

とはいえ問題はカテゴリー I に加えて II に属するものが確実に採録されているかどうか、である。福澤がアイディアを出して社説記者が下書きを担当しているカテゴリー II と、記者の持ち込み原稿に福澤が加筆しただけのカテゴリー III の論説には外見上の区別はない。そこでもしカテゴリー III や IV のものを I や II の論説と見誤ってしまうと、『全集』に福澤とは異なる社説記者の思想が混入することになるのである。

これまで不可能と考えられてきた『時事新報』論説の実際の起筆者を推定する試みを提唱したのは、比較文学者の井田進也である。井田はそれまで従事してきた中江兆民の無署名論説の判定での方法を福澤のものにも応用し、井田メソッドとでも言うべきものを確立した。関係論文は光芒社刊『歴史とテクストー西鶴から諭吉まで』(2001-12) で読むことができる。

井田メソッドとはおおよそ以下のような方法である。まず(1)『時事新報』に無署名論説を書いた可能性のある社説記者の署名入りの文章を集め、その人ならではの語彙や表現、さらに文体の特徴をよりだす。ついで(2)無署名の社説と特徴を比較することでもととの起筆者を推定する。さらに(3)福澤の書きぐせと一致する部分を探して福澤の添削の程度をみる。最後に(4)福澤の関与の度合いに応じてAからEまでの五段階評価をおこなう、というものである。

判定にあたり井田は福澤の語彙データや特徴的な文体や言い回しについての指摘をおこなっている。例えば、福澤と石河に関する指摘としては、福澤が「分て」「挙て」「為て」「最早」「否」など送りがな短縮形を用いることが多いのに対して、石河は「分れて」「挙げて」「為りて」「最早や」「否な」などと送りがなを付して表記し、また福澤は否定を「非ず」とするのにに対して石河は「ある可らず」と書くことが多い。

理由を示す「よりて」の漢字表記は、福沢が「由て」なのに、石河が「拠りて」を用いる、などである。

こうした井田の判定基準をもとにして、試みに福沢真筆とはっきり分かっている論説と、純粹に石河が書いた論説とを比較したところ、起筆者を判定するのに井田メソッドは極めて有効であることが判明した。

とはいえ、論者の見るところ、語彙と文体による井田の方法で高い確度をもつのは、カテゴリーIとそれ以外の区別だけである。福沢と社説記者との合作は多数あると想像できるが、それらを福沢の思想と見なすか見なさないかについて判断に迷うところではある。いったいC・D判定のものは福沢の思想なのであるだろうか。彼が筆を入れて掲載を認めたのだからそうである、という立場もあり得ようが、少々自分の意にそわぬものでも若い社説記者を励ますために掲載を許可することもあったであろう。

さらに福沢執筆の分量だけを基準にしてC・Dの判定をくだしたとしても、その論説が内容からいってどの程度福沢を反映しているのかは分からないということもある。研究者の竹田行之も指摘¹³⁾するように、たとえD判定でも、福沢によるそもそもの立案に近いからこそ加筆が少ないのかもしれないし、本当に優秀な社説記者ならば簡単なアイデアを伝授されただけでも、福沢がまさに言いたかったことを完璧に文章化できたかもしれない。

そうだとするとA判定が福沢の思想であることは確実でも、E判定は福沢ではないと断言することはできないのである。すなわち福沢が全く関与していないE判定の社説ばかりではなく、記者が優秀なるがゆえの名誉のEともいえるべき文章があるということになる。

このように、『時事新報』論説の分類というのは考えれば考えるほど截然とはできなくなってくる。この点を考慮しつつ、次に、比較的純度が高いと推定できる大正版「時事論集」収録論説のリストと、個々の論説の起筆者を推定したい。

13) 「『時事新報論集』について」福澤諭吉協会編『福澤諭吉年鑑』第22号(1995-12)28頁。

Ⅱ 資料篇

大正版『福澤全集』「時事論集」所収論説・演説一覧

凡例

- (1) 大正版表題・掲載年月日・大正版所在・現行版表題（これは発表時の表題で大正版と同一の場合は省略）・現行版所在・推定起筆者の順で表示する。
- (2) 大正版に未収録となっている論説・演説集『修業立志編』*¹⁴⁾(1898-4)に掲載されているものは、現行版所在の後に表題（大正版や現行版と同一の場合は省略）を示し、所在を（修三15頁）など并表示する。これは『修業立志編』の3番目の論説で15頁から掲載されているという意味である。
- (3) 自筆草稿が慶應義塾福澤研究センターに所蔵されている場合は、その旨注記している。
- (4) 大正版には石河が起筆したと明記されている論説が14編あるが、それも注記してある。
- (5) 起筆者の推定は暫定的なもので、今後変更される可能性もある。福澤以外とした場合には脚注に根拠を示している場合がある。

番外 国会論（郵便報知新聞社説）79-7-29/8-14（大⑧374頁・現⑤63頁）福澤

- 1 時事新報發兌之趣旨 82-3-1(大⑧1頁) 本紙發兌之趣旨(現⑧5頁) 中上川¹⁵⁾
- 2 朝鮮の交際を論ず 82-3-11(大⑧411頁・現⑧28頁)福澤
- 3 僧侶論(演説)82-3-13 (大⑨467頁・現⑧31頁)福澤
- 4 通貨論 82-3-13/16 (大⑨1頁・現⑧34頁)福澤
- 5 物理學の要用 82-3-22(大⑩1頁) 物理學之要用(現⑧49頁)福澤
- 6 経世の學亦講究す可し 82-3-23 (大⑨261頁・現⑧52頁) 福澤
- 7 遺傳之能力 82-3-25,27 (大⑩5頁・現⑧56頁)福澤
- 8 故社員の一言今尚ほ精神（寄書）82-3-27(大⑩365頁) 故社員の一言今尚精神

14) 『修業立志編』には17編の演説と25編の論説が収められているのであるが、論説のうちの9編は現在までのいかなる全集にも載録されていない。そのことのもつ意味については拙論「なぜ『修業立志編』は『福澤全集』に収録されていないのか？」ペリカン社刊・石毛忠編『伝統と革新—日本思想史の探求』（2004-3）所収、を参照のこと。

15) 現行版⑧9頁に「我輩」とは別に「福沢先生」が登場。中上川が主筆として執筆したと考えられる。

(現⑧62頁)福澤

- 9 圧制も亦愉快なる哉 82-3-28 (大⑧415頁・現⑧64頁) 福澤
- 10 藩閥寡人政府論 82-5-17/6-17(大⑧8頁・現⑧111頁)福澤
- 11 藩閥寡人政府論に就て 82-6-13(大⑧69頁)時事新報発行解停(現⑧160頁)福澤
- 12 時勢問答 82-6-23/7-8 (大⑧73頁・現⑧180頁)福澤
- 13 局外窺見 82-7-19/29 (大⑧98頁・現⑧216頁) 福澤 (自筆草稿あり)
- 14 東洋の政略果して如何 82-12-7/12 (大⑧418頁)東洋の政略果して如何せん(現⑧427頁)波多野¹⁶⁾ (福澤の自筆草稿あり)
- 15 急変論 82-12-18,19 (大⑨266頁・現⑧458頁)福澤
- 16 徳育余論 82-12-20,21 (大⑨273頁・現⑧465頁)福澤
- 17 牛場君朝鮮に行く(大⑧439頁) 83-1-11/13 牛場卓造君朝鮮に行く(現⑧497頁) 福澤
- 18 米國我馬関償金を返す 83-1-25 (大⑧451頁・現⑧519頁)福澤
- 19 売薬論 83-1-26/27 (大⑩12頁・現⑧523頁)福澤
- 20 通俗売薬論 83-1-31(大⑩20頁)売薬論 (現⑧530頁) 福澤
- 21 開國論 83-2-14/3-24 (大⑧455頁・現⑧541頁)福澤
- 22 正直は藝に非ず 83-2-27(大⑩61頁) 正直は藝にあらず(現⑧558頁)福澤
- 23 時事新報の一周年 83-3-1(大⑩371頁)時事新報の一周年日(現⑧561頁)中上川
- 24 文明進退論83-4-16/21 (大⑧125頁) 西洋諸国の文明は其实物に就て之を見よ 83-4-16(現⑧596頁) 文明開化の進歩は次第に其速力を増す83-4-17(現⑧599頁) 人事は有形の文明に由て左右す可し83-4-19(現⑧602頁)文明の利器果して廃す可きや 83-4-20(現⑧605頁)政治の熱心を誘導する其法なきに非ず83-4-21(現⑧608頁) 以上福澤 (自筆草稿あり)
- 25 攻防論 83-4-30/5-19(大⑧141頁・現⑧622頁)福澤 (自筆草稿あり)
- 26 道德の議論は輕躁に判断す可らず83-5-10(大⑨349頁・現⑧652頁) 福澤
- 27 儒教主義の成跡甚だ恐る可し83-5-26(大⑨280頁・現⑧662頁) 福澤
- 28 社会の秩序は紊乱の中に却て燦然たるものを見る可し83-5-31(大⑩159頁・現⑧666頁) 福澤
- 29 壮年輩の失敗 (演説) 83-7-5(大⑨537頁) [青年輩の失敗] (現⑨82頁) 福澤 (渡辺筆記)

16) この論説には福澤の自筆草稿が残されている。ただし浄書であるので、別人の下書きがあったと推定。表現と語彙からは波多野にもっとも近い。

大正版『福澤全集』「時事論集」所収論説一覧及び起筆者推定

- 30 通俗医術論 83-9-10,11(大⑩26頁・現⑨166頁) 福澤
- 31 士族の授産は養蚕製糸を第一とす 83-9-13/17 (大⑨14頁・現⑨172頁) 福澤
- 32 外交論 83-9-29/10-4(大⑧472頁・現⑨192頁) 渡辺¹⁷⁾ (福澤の自筆草稿あり)
- 33 婦女孝行論 83-10-8(大⑨353頁・現⑨207頁) 中上川
- 34 思想精密、鄙事多能 83-10-13 (大⑩65頁) 思想精密にして鄙事に多能なる可し
(現⑨210頁) 渡辺
- 35 婦女孝行余論 83-10-18(大⑨357頁・現⑨219頁) 中上川
- 36 西洋人と日本國 83-10-30/31(大⑧487頁) 日本の用終れり 83-10-30(現⑨237頁)
西洋人の日本を疎外するは内外両因あり 83-10-31 (現⑨241頁) 高橋
- 37 西洋人と日本國に就て 83-11-7(大⑧495頁) 時事新報解停 (現⑨244頁) 福澤
- 38 儒教主義 83-11-19/21(大⑨361頁・現⑨268頁) 中上川
- 39 徳教之説 83-11-22/29(大⑨373頁・現⑨277頁) 福澤 (自筆草稿あり)
- 40 政事と教育 83-12-7,8(大⑨284頁) 政事と教育と分離す可し (現⑨308頁) 福澤
(自筆草稿あり)
- 41 学生処世の方向 (演説) 83-12-18,19 (大⑨542頁・現⑨328頁) 福澤
- 42 衛生上の注意 (演説) 84-1-28(大⑩371頁) [衛生上の注意] (現⑨370頁) 福澤
- 43 内地雑居の喜憂 84-2-20,21(大⑧502頁・現⑨401頁) 中上川
- 44 血統論 (演説) 84-3-26(大⑩33頁・現⑨445頁) 福澤
- 45 経世に高尚論は無用なり 84-4-24(大⑧164頁・現⑨469頁) 福澤
- 46 開鎖論 84-5-19/22(大⑧510頁・現⑨489頁) 渡辺
- 47 清朝の秦檜胡澹庵 84-9-8(大⑧528頁・現⑩33頁) 渡辺
- 48 宗旨宣布の方便 84-10-2,3(大⑨470頁・現⑩52頁) 福澤
- 49 貧富論 84-10-24/30(大⑩162頁・現⑩80頁) 福澤 (自筆草稿あり)
- 50 通俗道德論 84-12-1/6(大⑨395頁・現⑩113頁) 福澤
- 51 前途春如海 85-1-2(大⑧532頁・現⑩176頁) 中上川
- 52 國交際の主義は修身論に異なり 85-3-9 (大⑧536頁・現⑩234頁) 福澤
- 53 兵備拡張論の根拠 85-3-26,27(大⑧613頁・現⑩242頁) 福澤
- 54 杉田茂卿先生の祭典に付 (演説) 85-4-7 (大⑩377頁) 明治十八年四月四日梅
里杉田茂卿先生の祭典に付演説 (現⑩250頁) 福澤
- 55 錢の國たる可し 85-4-29/5-2(大⑨29頁) 西洋の文明開化は錢に在り 85-4-29 (現

17) この論説にも福澤の自筆草稿が残されているが、註16と同じ理由で渡辺の下書きを書き換えたものと推定。

- ⑩269頁) 日本は尚未だ錢の國に非ず 85-5-1(現⑩272頁) 日本をして錢の國たらしむるに法あり 85-5-2(現⑩275頁) 福澤
- 56 改革と滅亡と択む所を知れ 85-6-1,2(大⑨478頁・現⑩289頁) 高橋
- 57 老壯論 85-6-19,20 (大⑩189頁、現⑩299頁) 渡辺
- 58 経世上に宗教の功德を論じて併せて布教法の意見を述ぶ(演説) 85-7-21(大⑨487頁・現⑩326頁) 福澤
- 59 慶應義塾暑中休業に付き(演説) 85-7-31(大⑨548頁・現⑩353頁) 福澤
- 60 立身論 85-8-1/6(大⑩381頁・現⑩357頁) 福澤
- 61 コレラの用心 85-9-5 (大⑩37頁・現⑩415頁) 福澤
- 62 教法の盛衰は世の不景気に係はる筈なし 85-9-17,18(大⑨494頁・現⑩427頁) 福澤
- 63 英吉利法律学校開校式(演説) 85-9-22 (大⑩401頁・現⑩434頁) 福澤
- 64 拝借論 85-9-25,26(大⑨40頁・現⑩439頁) 福澤
- 65 封建の時代に取る可きものあり 85-11-17(大⑨435頁・現⑩461頁) 福澤
- 66 錦衣何ぞ必ずしも故郷に限らん 85-11-18,19(大⑩68頁・現⑩464頁) 福澤
- 67 外債論 85-12-3/8(大⑨47頁・現⑩470頁) 福澤
- 68 日本工商の前途如何 86-1-8/12(大⑨63頁・現⑩523頁) 福澤
- 69 節儉論 86-1-22/26(大⑨78頁・現⑩538頁) 福澤
- 70 学生諸氏に告ぐ(演説) 86-2-2(大⑨554頁) 慶應義塾学生諸氏に告ぐ(現⑩549頁) 学問の要は実学にあり(修十一 71頁) 福澤
- 71 余が洋学に志したる由縁(演説) 86-2-18 (大⑩76頁) 成学即身実業の説、学生諸氏に告ぐ(現⑩554頁) 成学即ち実業家の説(修十三 86頁) 福澤
- 72 國役は國民平等に負担す可し 86-2-20/23 (大⑧620頁・現⑩557頁) 福澤
- 73 文明を買ふには錢を要す 86-3-2 (大⑨92頁・現⑩571頁) 福澤
- 74 德行論(演説) 86-3-4 (大⑨560頁・現⑩577頁・修二十四 155頁) 福澤
- 75 男女交際余論 86-6-23/26 (大⑩196頁・現⑩45頁) 福澤
- 76 金玉均氏 86-8-11 (大⑧540頁・現⑩79頁) 福澤
- 77 小笠原島の金玉均氏 86-8-25 (大⑧544頁・現⑩88頁) 福澤
- 78 世界は甚だ広し 86-9-15 (大⑩80頁) 世界甚だ広し独立の士人不平を鳴らす勿れ(現⑩102頁) 福澤
- 79 学者と町人 86-9-29/10-1 (大⑩89頁) 学問の所得を活用するは何れの地位に於てす可きや 86-9-29 (現⑩112頁) 今の学者は商売に適するものなり 86-9-30

大正版『福澤全集』「時事論集」所収論説一覧及び起筆者推定

- (現⑪115頁) 素町人の地位取て代はる可し 86-10-1 (現⑪118頁) 福澤
- 80 婚姻早晚論 86-12-1,2 (大⑩196頁・現⑪153頁) 福澤
- 81 歳末論 86-12-31 (大⑩408頁) 歳末の1言学者後進生に呈す (現⑪166頁) 福澤
- 82 社会の形勢学者の方向 (演説) 87-1-15/24 (大⑩218頁) 社会の形勢学者の方向、慶應義塾学生に告ぐ (現⑪183頁) 福澤
- 83 交詢社の特色 (演説) 87-4-18 (大⑩250頁) [交詢社の特色] (現⑪240頁) 福澤
- 84 日本人と西洋人と内外表裏の別 87-4-20/23 (大⑩255頁・現⑪243頁) 福澤
- 85 富貴浮雲の如し (演説) 87-5-4 (大⑨563頁) 明治二十年四月二十三日慶應義塾演説館にて学生諸氏に告ぐ (現⑪254頁) 恃むべきは唯自家の才力あるのみ (修十 65頁) 福澤
- 86 流言亦以て道德城を堅くするに足る可し (大⑨438頁・現⑪264頁) 渡辺
- 87 節儉と奢侈 87-6-18/21 (大⑨95頁・現⑪275頁) 高橋
- 88 教育の経済 87-7-14/16 (大⑨299頁・現⑪305頁) 福澤
- 89 政略 87-8-15/17 (大⑧168頁・現⑪332頁) 福澤 (自筆草稿あり)
- 90 私権論 87-10-6/12 (大⑧178頁・現⑪375頁) 福澤
- 91 御用商人 87-10-28 (大⑨107頁・現⑪392頁) 福澤
- 92 芝居論 87-11-3 (大⑩404頁・現⑪395頁) 高橋
- 93 経済小言 87-12-5/12-9 (大⑨110頁・現⑪402頁) 福澤
- 94 施政邇言 88-1-5/9 (大⑧197頁・現⑪423頁) 石河
- 95 徳教の本は私徳に在り 88-2-9/23 (大⑨442頁) 徳教の主義は各その独立に任す可し 88-2-9 (現⑪436頁) 徳風の衰えたるは一時の変相たるに過ぎず 88-2-10 (現⑪439頁) 徳教の要は其実施に在り 88-2-11 (現⑪441頁) 徳風を正に帰せしむるの法は其实例を示すに在り 88-2-13 (現⑪444頁・修二十七 172頁) 私徳固くして楽事多し 88-2-23 (現⑪447頁・修二十五 162頁) 福澤
- 96 西洋学と古学流 (演説) 88-3-17 (大⑨567頁) 慶應義塾学生に告ぐ (現⑪461頁) 物理学の必要 (修十五 101頁) 福澤
- 97 智慧の貸借 (演説) 88-4-22 (大⑩100頁) [明治二十一年四月十五日交詢社会堂に於ける交詢社第九回大会演説] (現⑪695頁) 福澤
- 98 博士会議 88-5-17 (大⑨312頁・現⑪485頁) 福澤
- 99 公共の教育 88-5-24/26 (大⑨316頁・現⑪488頁) 福澤
- 100 一身の広告 (演説) 88-6-5 (大⑨570頁) 六月二日府下三田慶應義塾演説、慶應義塾学生に告ぐ (現⑪496頁) 先づ鄙事に多能なるべし (修十二 81頁) 福澤

- 101 医説 88-6-12(大⑩42頁・現⑪502頁) 福澤
- 102 金利の説 88-7-19,20(大⑨125頁・現⑪523頁) 福澤
- 103 徳教は目より入りて耳より入らず 89-1-30(大⑨459頁・現⑫9頁・修二十六167頁) 福澤
- 104 一國の徳風は一身より起る 89-1-30 (大⑨462頁・現⑫11頁) 福澤
- 105 日本國會縁起 89-2-12/22(大⑧212頁・現⑫21頁) 福澤
- 106 ドクトル・セメンズを弔す (演説) 89-3-1(大⑩410頁・現⑫54頁) 福澤
- 107 貧富痴愚の説 89-3-6,7(大⑨327頁・現⑫62頁) 福澤
- 108 市川団十郎 89-3-30(大⑨464頁・現⑫84頁) 福澤
- 109 慶應義塾學生に告ぐ (演説) 89-4-22,23(大⑨574頁・現⑫97頁) 福澤
- 110 知識交換 (演説) 89-4-24(大⑨102頁) 明治二十二年四月二十一日交詢社大会に於て演説 (現⑫102頁) 福澤
- 111 國會準備の実手段 89-4-26/5-6 (大⑧246頁・現⑫104頁) 福澤
- 112 洋学の命脈 (演説) 89-5-7 (大⑩415頁) 一昨五日植半樓に開きし慶應義塾旧友会の席上に於ける福澤先生演説の筆記 (現⑫130頁) 慶應義塾の懷旧談 (修六31頁) 福澤
- 113 宗教雜話 (演説) 89-5-11 (大⑨502頁) 宗旨雜話 (現⑫134頁) 福澤
- 114 疑心と惑溺 89-5-14 (大⑩268頁) 疑心と惑溺と (現⑫137頁) 福澤
- 115 華族の教育 (演説) 89-5-19 (大⑨333頁・現⑫139頁) 福澤
- 116 日本國の功勞 89-5-23 (大⑩420頁・現⑫145頁) 福澤
- 117 智と情と 89-6-15 (大⑩272頁・現⑫161頁) 福澤
- 118 市參事會員辭職始末 89-6-24 (大⑩423頁) 福澤先生名譽職市參事會員辭職の始末 (現⑫165頁) 菊池
- 119 官尊民卑売言葉に買言葉 89-6-26 (大⑧276頁・現⑫171頁) 福澤
- 120 寺門をして其本色に還らしむ可し 89-7-5,6 (大⑨505頁・現⑫176頁) 福澤
- 121 漫に大望を抱く勿れ 89-7-9 (大⑩105頁・現⑫185頁) 福澤
- 122 富豪維持の説 89-7-10/15 (大⑩109頁・現⑫188頁) 福澤
- 123 文明教育論 89-8-5 (大⑨338頁・現⑫218頁・修十九 120頁) 福澤
- 124 東京三百年祭 89-8-23 (大⑩430頁・現⑫230頁) 福澤
- 125 条約改正始末 89-12-2/7 (大⑧547頁・現⑫297頁) 福澤
- 126 運の説 90-1-2 (大⑩125頁・現⑫329頁) 福澤
- 127 少壯生の始末を如何せん 90-2-26/3-3 (大⑩276頁・現⑫372頁) 石河

大正版『福澤全集』『時事論集』所収論説一覧及び起筆者推定

- 128 実業家の学術思想 90-3-5 (大⑩434頁・現⑫388頁・修三十二 202頁) 福澤
- 129 読倫理教科書 90-3-18 (大⑨420頁・現⑫397頁) 福澤
- 130 洋学の先人へ贈位 90-4-4 (大⑩293頁・現⑫409頁) 福澤
- 131 米商論 90-4-23/25 (大⑨134頁・現⑫415頁) 福澤
- 132 世務諮詢 (演説) 90-4-30 (大⑩125頁) 明治二十三年四月二十七日交詢社大会
(現⑫424頁) 福澤
- 133 財政始末 90-5-29/6-4 (大⑨145頁・現⑫426頁) 福澤
- 134 安寧策 90-7-1/8 (大⑧279頁・現⑫450頁) 石河
- 135 学林中の松梅 (演説) 90-7-21 (大⑨580頁) [学林中の松梅] (現⑫474頁) 福澤
- 136 尚商立國論 90-8-27/9-1 (大⑨165頁・現⑫484頁) 福澤 (自筆草稿あり)
- 137 塾政の自治 (演説) 90-10-16 (大⑨585頁) [塾政の自治] (現⑫522頁) 福澤
- 138 精神の健康 (演説) 90-10-30 (大⑨587頁) 十月二十五日慶應義塾演説筆記
(現⑫528頁) 福澤
- 139 学生の心得 (演説) 90-11-17 (大⑨590頁) 十一月八日慶應義塾演説筆記 (現
⑫532頁) 福澤
- 140 同窓の旧情 (演説) 90-11-19 (大⑩437頁) [同窓の旧情] (現⑫535頁) 福澤
- 141 孝行の易行道 (演説) 90-12-1 (大⑨594頁) 十一月二十二日慶應義塾演説 (現
⑫542頁) 福澤
- 142 同情相憐 91-3-25 (大⑩440頁・現⑬42頁) 福澤
- 143 文明の偽筆 91-4-14 (大⑩45頁) 文明の偽筆は無筆者の能くする所に非ず (現
⑬55頁) 福澤
- 144 貧富論 91-4-27/5-21 (大⑩296頁・現⑬69頁) 福澤
- 145 後進生の心掛 91-7-10 (大⑩130頁) 後進生の家を成すは正に今日に在り (現⑬
155頁) 福澤
- 146 老生のお話を学べ (演説) 91-7-15 (大⑨597頁) 明治二十四年七月十一日慶應
義塾演説大意 (現⑬158頁) 金銭は独立の基本なり (修五 24頁) 福澤
- 147 独立の大義 (演説) 91-8-2 (大⑨602頁) 明治二十四年七月二十三日慶應義塾
の卒業生に告ぐ (現⑬166頁) 独立の大義を忘るゝ勿れ (修二 9頁) 福澤
- 148 徳に在て財に在らず 91-8-11 (大⑨512頁) 寺門の患は徳に在て財に在らず (現
⑬171頁) 福澤
- 149 文明男子の生計 91-8-12 (大⑩134頁) 文明男子の生計を如何せん (現⑬174頁)
福澤

- 150 紳士流の漫遊旅行 91-8-13 (大⑩447頁) 紳士流の漫遊旅行狂するが如し (現⑬177頁) 福澤
- 151 旅館の主人 91-8-14 (大⑩450頁) 旅館の主人も亦狂して窮する者歟 (現⑬180頁) 福澤
- 152 子弟教育費 91-9-11 (大⑨342頁・現⑬186頁) 福澤
- 153 独立自由 (演説) 91-10-20 (大⑨605頁) 明治二十四年十月十日慶應義塾演説筆記 (現⑬205頁) 須く他人を助けて独立せしむべし (修三 15頁) 福澤
- 154 地震は建築法の大試験 91-11-1 (大⑩47頁・現⑬218頁) 福澤 (自筆草稿あり)
- 155 震災善後の法 91-11-7 (大⑨517頁・現⑬222頁) 福澤
- 156 医薬分業行はれ難し 91-12-9 (大⑩50頁・現⑬236頁) 福澤 (自筆草稿あり)
- 157 唯其病はれ憂ふ (演説) 92-2-20 (大⑨609頁) 明治二十五年二月十三日慶應義塾演説筆記 (現⑬306頁) 父母は唯其病はれ憂ふ (修三十五 219頁) 福澤
- 158 貴顕紳士の夫人内室 92-3-9 (大⑩340頁) 貴顕紳士の婦人内室 (現⑬308頁) 石河
- 159 借家の説 92-3-10 (大⑩343頁・現⑬310頁) 福澤
- 160 政論に酔ふ勿れ (演説) 92-3-18 (大⑨612頁) 明治二十五年三月十二日慶應義塾演説筆記 (現⑬323頁) 須く政論の上戸となるべし (修十六 108頁) 福澤
- 161 下女の炊くを見たり (演説) 92-4-2 (大⑨614頁) 明治二十五年三月二十六日慶應義塾演説筆記 (現⑬332頁) 衛生の要は消化の如何にあり (修三十六 224頁) 福澤
- 162 社会の教育 (演説) 92-4-26 (大⑩138頁) 明治二十五年四月二十四日交詢社第十三回大会に於て演説 (現⑬354頁) 福澤 (自筆草稿あり)
- 163 小康策 92-5-31/6-5 (大⑧305頁・現⑬373頁) 福澤
- 164 先づ僧心の非を正す可し 92-7-7 (大⑨520頁) 仏法の盛衰は僧侶の心如何に在り (現⑬403頁) 福澤
- 165 一大英断を要す 92-7-19,20 (大⑧319頁・現⑬412頁) 石河¹⁸⁾
- 166 資本の要用 92-9-28/30 (大⑨182頁・現⑬512頁) 福澤 (自筆草稿あり)
- 167 縁の下の方持 (演説) 92-10-28,29 (大⑨617頁) 明治二十五年十月二十三日慶應義塾演説筆記 (現⑬554頁) 小心翼翼以て大功を帰すべし (修九 54頁) 福澤

18) この次期以降石河起筆の論説が目立って増加してくる。この論説は『福沢論吉伝』で重要視されているが、「恐る可き」「の沙汰」「赤心」「申す迄もなく」という石河が多用する表現や語彙があるため、起筆者が石河自身であることははっきりしている。

大正版『福澤全集』『時事論集』所収論説一覧及び起筆者推定

(自筆草稿あり)

- 168 女子教育 92-11-10 (大⑨345頁・現⑬564頁) 石河
- 169 商業倶楽部演説 (演説) 92-11-15,16 (大⑨624頁) 明治二十五年十一月五日慶應義塾商業倶楽部の演説筆記 (現⑬566頁) 福澤
- 170 人間万事小児の戯 (演説) 92-11-24 (大⑨631頁) 明治二十五年十一月十二日慶應義塾演説筆記 (現⑬572頁) 人間万事児戯の如し (修八 48頁) 福澤
- 171 富豪の要用 92-12-16/18 (大⑨192頁・現⑬588頁) 福澤
- 172 寿命の大小 93-1-4 (大⑩454頁・現⑬620頁・修三十七 230頁) 福澤
- 173 銀貨下落 93-1-19/22 (大⑨203頁・現⑬632頁) 福澤 (自筆草稿あり)
- 174 社会の人心は其尚ぶ所に赴く 93-3-14 (大⑩346頁・現⑭9頁・修三十四 213頁) 福澤
- 175 体育の目的を忘るる勿れ 93-3-23 (大⑨634頁・現⑭18頁・修四十 246頁) 福澤
- 176 先進と後進 93-4-25 (大⑩141頁・現⑭34頁・修二十九 186頁) 福澤
- 177 老生得意の奇話 (演説) 93-5-2 (大⑧567頁) 明治二十六年四月三十日東京帝国ホテル交詢社大会の演説 (現⑭38頁) 福澤
- 178 朝鮮防穀談判の落着 93-5-23 (大⑧572頁) 朝鮮談判の落着、大石公使の挙動 (現⑭61頁) 石河 (大正版に明記)
- 179 新旧両主義 93-6-9 (大⑩144頁・現⑭71頁・修三十 190頁) 福澤
- 180 士流の本分を忘る可らず 93-6-27 (大⑨642頁・現⑭82頁・修二十二 147頁) 福澤
- 181 無学の弊恐る可し 93-10-6 (大⑩457頁・現⑭147頁・修三十一 195頁) 石河
- 182 銅像開被に就て (演説) 93-11-1 (大⑩461頁・現⑭179頁・修七 39頁) 福澤
- 183 人生の楽事 (演説) 93-11-14 (大⑨637頁・現⑭195頁・修十七 111頁) 福澤
- 184 星議員の除名 93-12-15 (大⑧327頁) 星議員除名 (現⑭229頁) 福澤
- 185 日本外交の進歩 94-1-16/17 (大⑧578頁・現⑭261頁) 石河 (大正版に明記)
- 186 維新以来政界の大勢 94-3-1/15 (大⑧330頁・現⑭289頁) 石河
- 187 新聞記者に告ぐ 94-3-29 (大⑩466頁・現⑭327頁) 石河
- 188 国民の体格、配偶の選択 94-4-7 (大⑩349頁・現⑭336頁) 国民の体格と配偶の選択 (修三十九 239頁) 石河
- 189 支那政府の長州征伐 94-7-22 (大⑧632頁・現⑭472頁) 石河 (大正版に明記)
- 190 大に軍費を醸出せん 94-7-29 (大⑧638頁・現⑭492頁) 石河
- 191 軍資の義捐 94-8-14 (大⑧641頁) 軍資の義捐を祈る (現⑭512頁) 石河

- 192 私金義捐に就て 94-8-14 (大⑩469頁・現⑭514頁) 福澤 (署名入り)
- 193 日本臣民の覚悟 94-8-28,29 (大⑧643頁・現⑭545頁) 石河
- 194 富豪大家何を苦んで商売せざる 94-9-8 (大⑨217頁・現⑭557頁) 石河
- 195 日本男子の学問 (演説) 95-1-24 (大⑩473頁) 福澤先生の演説 (現⑮28頁) 福澤
- 196 外戦始末論 95-2-1/7 (大⑧650頁・現⑮40頁) 石河
- 197 日本銀行論 95-2-19/22 (大⑨221頁・現⑮65頁) 福澤
- 198 兇漢小山六之助 95-3-26 (大⑧676頁・現⑮106頁) 石河
- 199 私の小義侠に酔ふて公の大事を誤る勿れ 95-3-28 (大⑧680頁・現⑮110頁) 福澤
- 200 知識の膨張 (演説) 95-4-23 (大⑩146頁) 明治二十八年四月二十一日交詢社大会演説大意 (現⑮141頁) 福澤
- 201 唯堪忍す可し 95-6-1 (現⑧684頁・現⑮175頁) 福澤 (書簡で言及)
- 202 朝鮮問題 95-6-14 (大⑧589頁・現⑮188頁) 石河
- 203 道德の進歩 95-7-7 (大⑨424頁・現⑮222頁) 石河 (大正版に明記)
- 204 道德の標準 95-7-9 (大⑨428頁・現⑮226頁) 石河 (大正版に明記)
- 205 忠義の意味 95-7-10 (大⑨431頁・現⑮228頁) 石河 (大正版に明記)
- 206 還暦寿筵の演説 (演説) 95-12-14 (大⑩478頁) [還暦寿筵の演説] (現⑮333頁) 福澤
- 207 福澤氏古銭配分の記 96-3-11 (大⑩485頁・現⑮394頁) 福澤 (自筆草稿あり)
- 208 種痘の発明 (演説) 96-5-14 (大⑩57頁) 種痘発明 (現⑮427頁) 福澤
- 209 美味は飽き易し 96-8-19 (大⑩149頁) 集会と飲食 (現⑮493頁) 福澤
- 210 気品の源泉智徳の模範 (演説) 96-11-3 (大⑩489頁) [気品の源泉智徳の模範] (現⑮531頁) 福澤 (自筆草稿あり)
- 211 学生の帰省を送る (演説) 97-1-1 (大⑨645頁・現⑮571頁) 福澤 (自筆草稿あり)
- 212 幣制改革 97-2-21 (大⑨235頁・現⑮602頁) 福澤
- 213 日米の交際 97-5-11 (大⑧596頁・現⑮657頁) 石河 (大正版に明記)
- 214 対外前途の困難 97-6-25 (大⑧603頁・現⑯19頁) 石河 (大正版に明記)
- 215 学事改革の趣旨 (演説) 97-9-21 (大⑨650頁) 明治三十年九月十八日慶應義塾演説館にて学事改革の旨を本塾の学生に告ぐ (現⑯105頁) 福澤
- 216 開國同化は日本の国体に差支なし 97-10-5 (大⑩353頁・現⑯127頁) 石河

大正版『福澤全集』『時事論集』所収論説一覧及び起筆者推定

- 217 文明先輩の功労忘る可らず 97-10-27 (大⑩359頁・現⑩143頁) 石河 (大正版に明記)
- 218 本願寺の処分 97-12-5 (大⑨524頁・現⑩167頁) 石河 (大正版に明記)
- 219 血脈と法脈との分離 97-12-7 (大⑨527頁・現⑩169頁) 石河 (大正版に明記)
- 220 法運万歳の道なきに非ず 97-12-8 (大⑨530頁・現⑩172頁) 石河 (大正版に明記)
- 221 間違の進歩 (演説) 98-4-26 (大⑩151頁) 交詢社大会席上に於ける演説 (現⑩319頁) 福澤
- 222 官有鉄道論 98-8-21 (大⑨248頁・現⑩456頁) 石河 (大正版に明記)
- 223 奉祝長与専斎先生還暦 98-9-29 (大⑩494頁・現⑩487頁) 福澤 (署名入り)
- 224 恩賜に就ての所感 00-5-16 (大⑩498頁) 今回の恩賜に付き福澤先生の所感 (現⑩600頁) 石河 (大正版に明記)